



大阪府立大学  
高等教育開発センター

2016.2.22  
AP合同フォーラム@玉川大学

# 学修成果の可視化と FD活動との連動性

—大阪府立大学のこれまでの取組みと見えてきた課題—

大阪府立大学 高等教育開発センター  
特認助教 畑野 快

# 本報告の概要

いつからどのようにして調査を実施してきたか

調査から得られた課題をFD活動にどのように活かしているか

APではどのような取り組みをしているのか

# 大阪府立大学の概要

学生数 7,794名(学士課程5,958名、大学院1,836名)

2005年 府立3大学(旧府立・女子・看護)を統合、法人化

2012年 学士課程を再編、4学域13学類制に移行





# 本学の学生調査

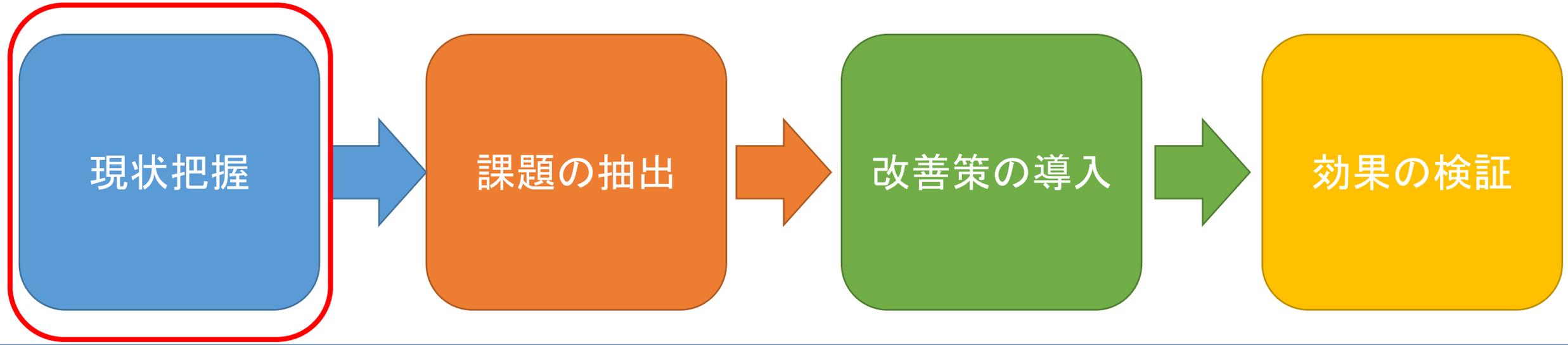
- 2007年 日本版大学生調査(JCSS)に参加(JCIRP)
- 2008年 卒業予定者アンケート(府大で独自に開発)を実施
- **2009年 戦略GP(※)採択→継続的な学生調査開始(JCIRP+CEFEUR)**  
(※)戦略的大学間連携推進プログラム  
「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク」
- 2011年 大学IRコンソーシアム発足  
加盟校...国公立39大学(2014年10月現在)

# 本学の学生調査

大学IRコンソーシアムの  
共通調査を使用

種類	対象	実施時期	実施年度	調査方法	配布・回収方法
一年生調査	B1	毎年11月頃	2009～	質問紙	授業時間内 (必修科目)
上級生調査	B3	毎年10月頃	2011～	質問紙	授業時間内
卒業予定者アンケート	B4	隔年2月頃	2008～	質問紙	研究室単位
修了予定者アンケート	M2	隔年2月頃	2008～	質問紙	研究室単位
卒業生調査	卒後5年		2014～	質問紙	郵送

## 学生調査・教務データとFD活動との関連

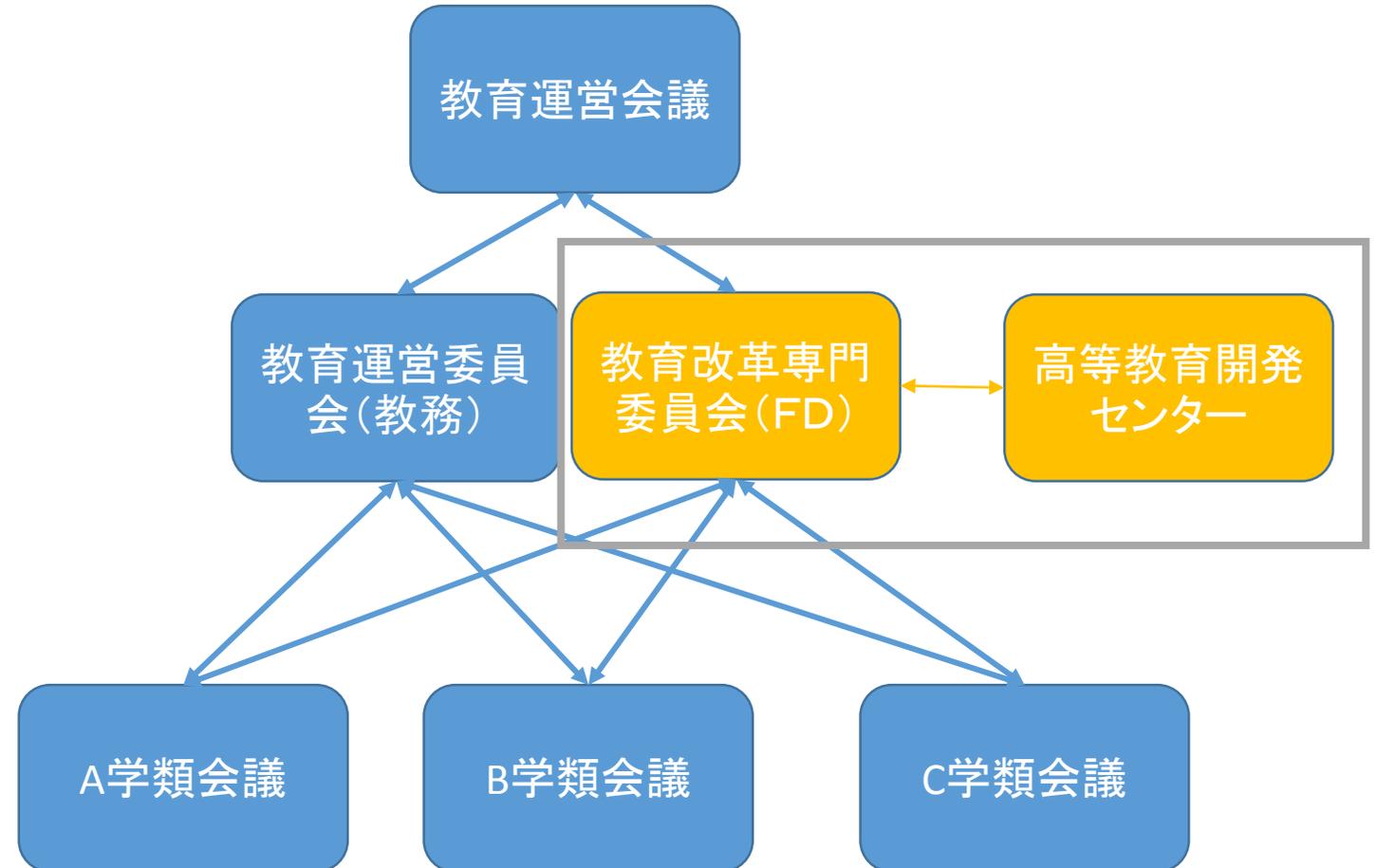


大学の現状把握、プログラムの効果の検証を行う際に、特に学生調査・教務データを活用

**特に現状を把握することは最初のステップとして重要！**

# 府大の教育に関する意思決定の組織図

- 教育運営会議：大学の教育に関する重要事項を審議する機関
- 教育改革専門委員会：FDに関する意思決定の委員会
- 高等教育開発センター：FDを全学的に推進する組織



# 現状の把握と教育改善活動

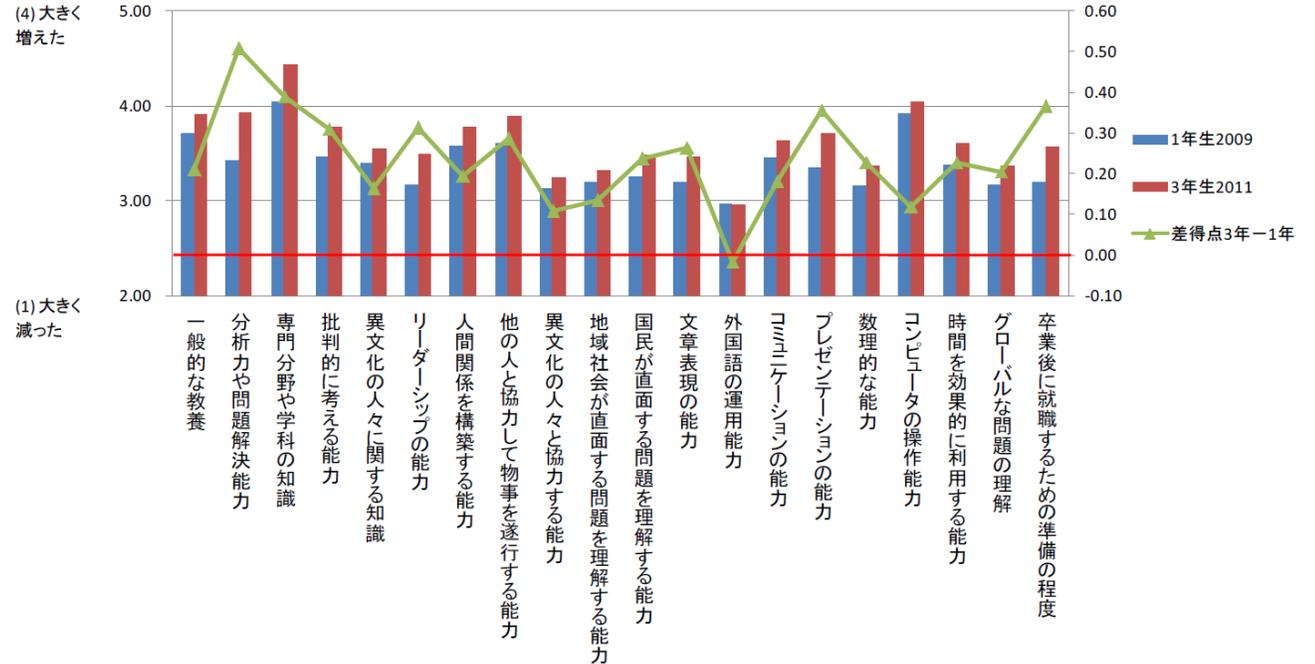
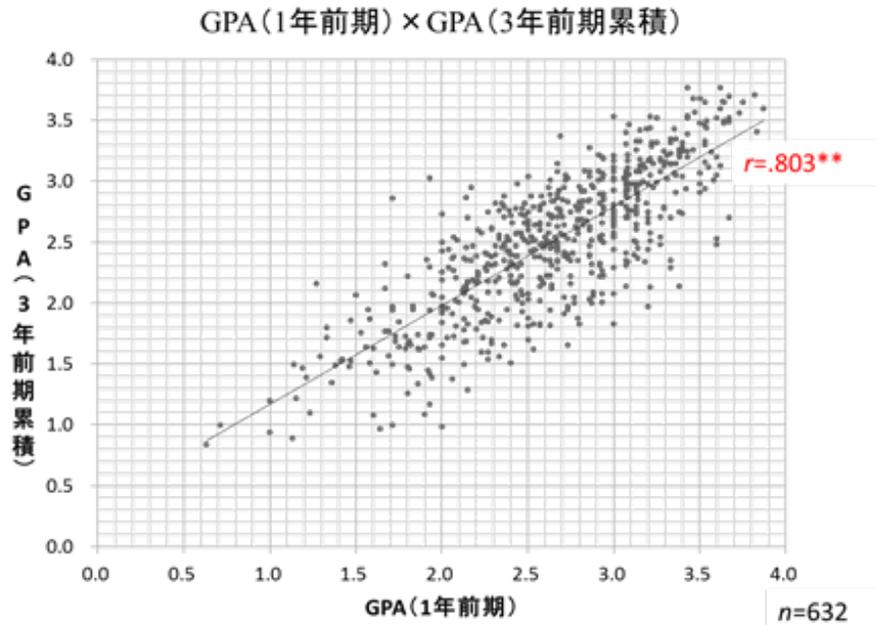
初年次ゼミナールの導入とその成果

Academic Englishの導入とその成果

# 学修成果の現状把握

## GPAと能力の獲得感の平均値から

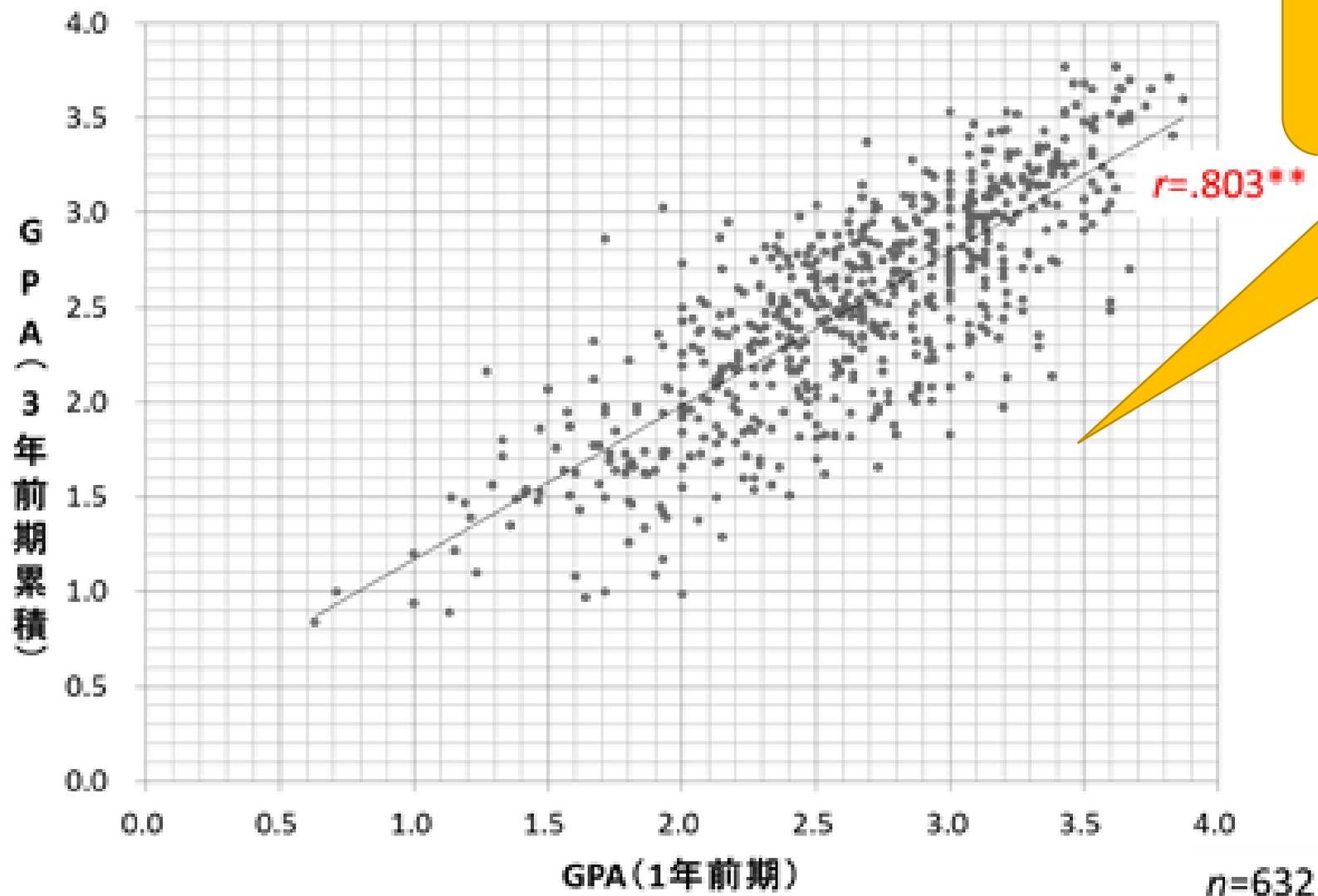
GPA(成績)は1年生から3年生にかけてほとんど変わらない



\*差得点0.00のところに赤線を引いている

# GPA(成績)は1年生から3年生にかけてほとんど変わらない

GPA(1年前期) × GPA(3年前期累積)



一年次に大学で学ぶ態度をしっかりと身に付けさせることが大事？

# 初年次ゼミナールの目的と特徴

## 目的

初年次を対象に、学生が知識の獲得だけでなく、活用できるようになるための体系だった授業科目(初年次ゼミナール)を導入し、高校までの受動的な学ぶ態度から大学での能動的な学びへの転換を図ること

- テーマ:担当教員が自由に設定(2015年度は全94テーマ)
- シラバス:学修成果の目標、成績評価の方法を明記
- クラス編成:全学域の学生を混在させるように工夫
- アカデミックスキルの修得:図書館ツアーの実施、プレゼンテーション・レポート作成の基本的なスキル修得を目指す
- アクティブラーニングの導入:学生同士のディスカッション、プレゼンテーションを授業に積極的に導入
- 授業外学修時間の強調:授業外で取り組む課題を徹底
- 1年次前期、2単位(全学必修科目)



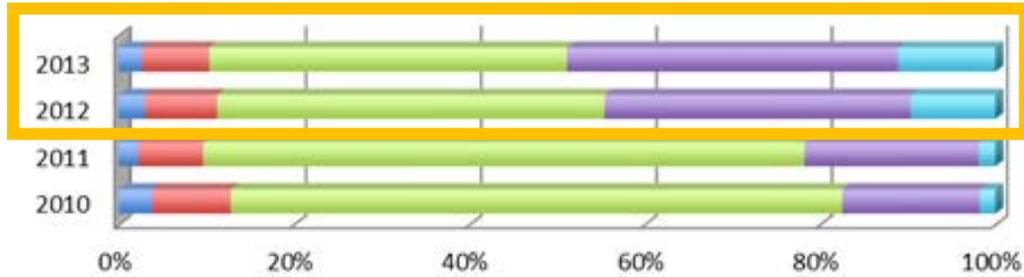
2014年初年次ゼミナール【学生向けアンケート】(回答率 81.9%(1,107/1,351名)) ※再履修クラスの10名を除いて実施

問2 初年次ゼミナールの授業を通じて、以下5点の「初年次ゼミナールの教育目標」はどの程度達成されましたか。

初年時ゼミナール教育目標	①できるように なった		②ある程度 できるようになった		③あまりできるように ならなかった		④できるように ならなかった		未回答		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
問2-(1) 他の受講生等の多様な視点を積極的に自分の学習に取り入れ、活用できるようになりましたか。	435	39.3%	591	53.4%	76	6.9%	4	0.4%	1	0.1%	1,107	100.0%
問2-(2) 様々な知識や情報の収集を、積極的に行えるようになりましたか。	539	48.7%	508	45.9%	57	5.1%	3	0.3%	0	0.0%	1,107	100.0%
問2-(3) 様々な方法で収集した知識や情報を活用して考えることができるようになりましたか。	482	43.5%	553	50.0%	68	6.1%	3	0.3%	1	0.1%	1,107	100.0%
問2-(4) 受講で得た情報や自分の考えを表現・発表できるようになりましたか。	464	41.9%	535	48.3%	103	9.3%	4	0.4%	1	0.1%	1,107	100.0%
問2-(5) 自分の考えを自分で再検討することができるようになりましたか。	413	37.3%	582	52.6%	108	9.8%	2	0.2%	2	0.2%	1,107	100.0%

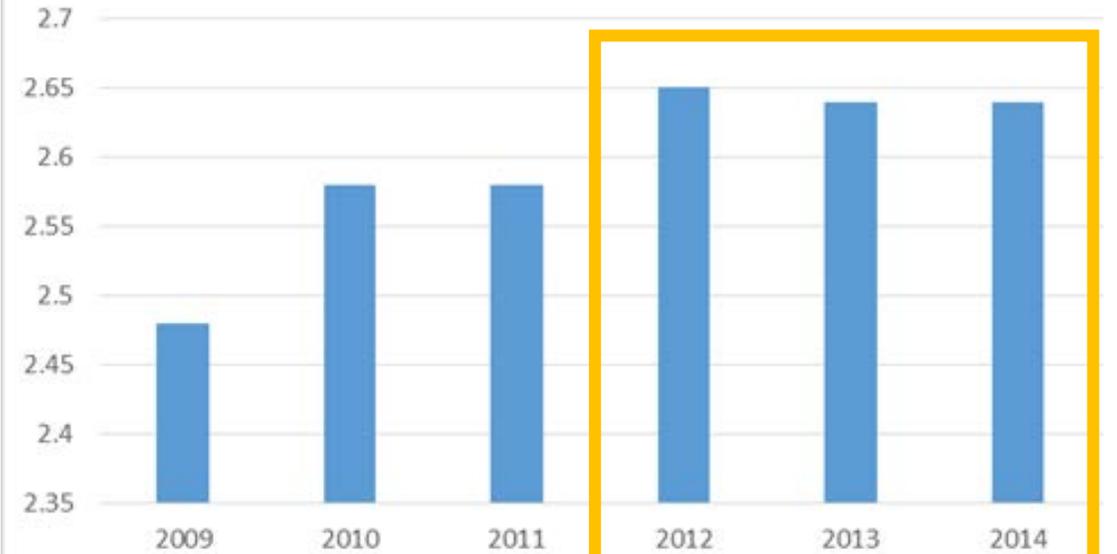
約90%の学生がそれぞれの目標を“できるようにになった”、“ある程度できるようになった”と回答

## 初年次教育満足度推移



	2010	2011	2012	2013
■とても不満	46	24	36	33
■不満	107	79	97	94
■どちらでもない	832	732	523	501
■満足	187	212	413	464
■とても満足	21	20	114	136

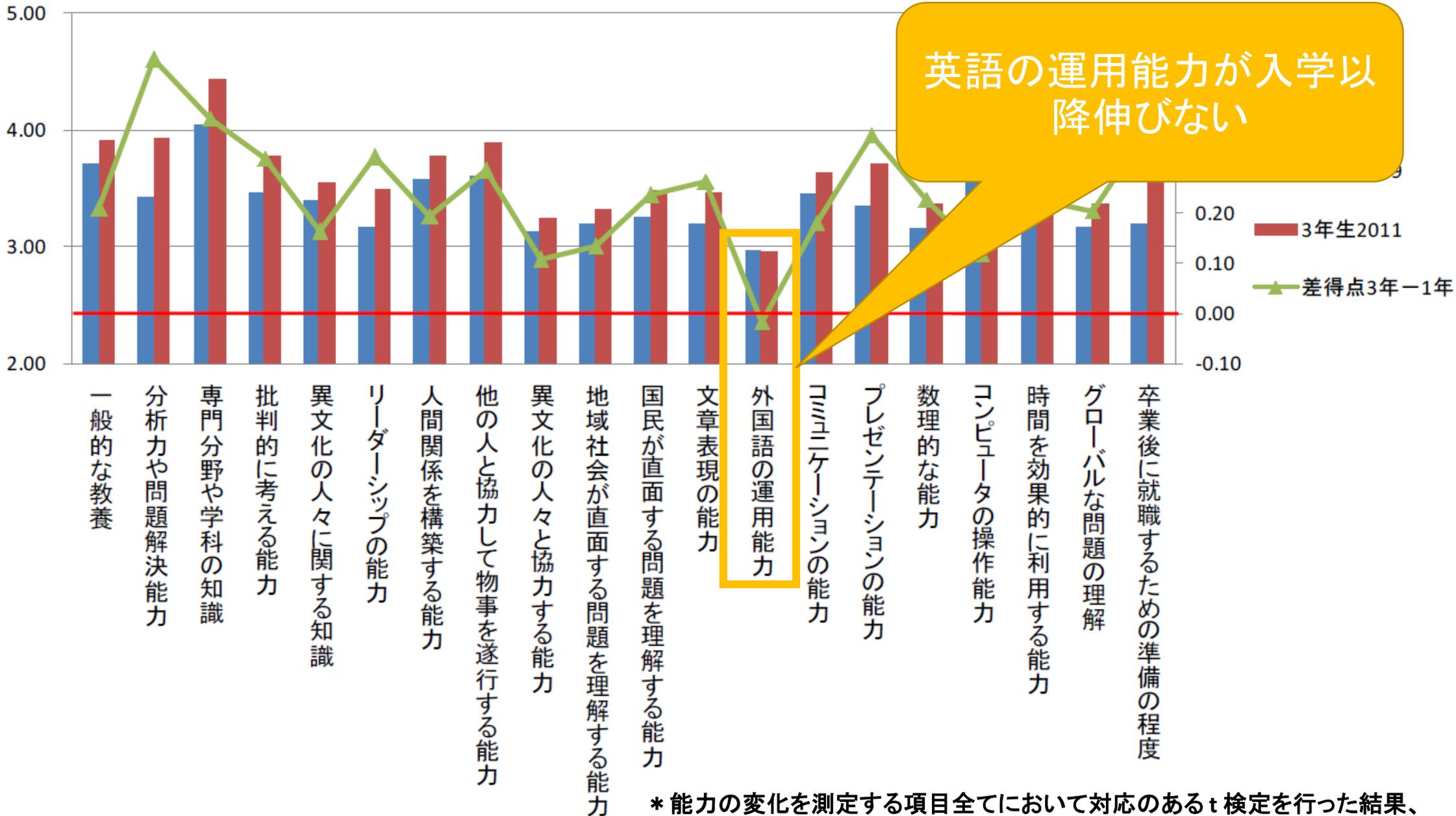
## 1年生前期GPA平均値



2011年から2012年にかけて初年次教育プログラムの満足度、GPAの平均点が上昇

(4) 大きく  
増えた

(1) 大きく  
減った



英語の運用能力が入学以降伸びない

\*差得点0.00のところを赤線を引いている

\*能力の変化を測定する項目全てにおいて対応のあるt検定を行った結果、「外国語の運用能力」以外の全ての項目に関して統計的な有意差が見られた。

高橋・星野・溝上(2014)

# Academic Englishの目的と特徴

## 目的

3年次以降の専門科目等で必要となるアカデミックな英語運用能力を強化すること

- 2012年度から導入
- 少人数制の導入(40名→25名)
- 1年次4科目、2年次2科目(全学必修)
- 4技能(読む、書く、聞く、話す)の中から、身につける能力を科目ごとに明確化
- 1年次:日本人教員、4技能の基礎を作る。
- 2年次:ネイティブスピーカー教員、ライティング・プレゼンテーション・コミュニケーション能力を強化する。

# 2009年度一年生調査と2011年度上級生調査の比較(抜粋)

[11]あなたの英語能力を聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力の5つの観点から自己評価した場合に、どのレベルまで到達していると思いますか。

## A.聞く力

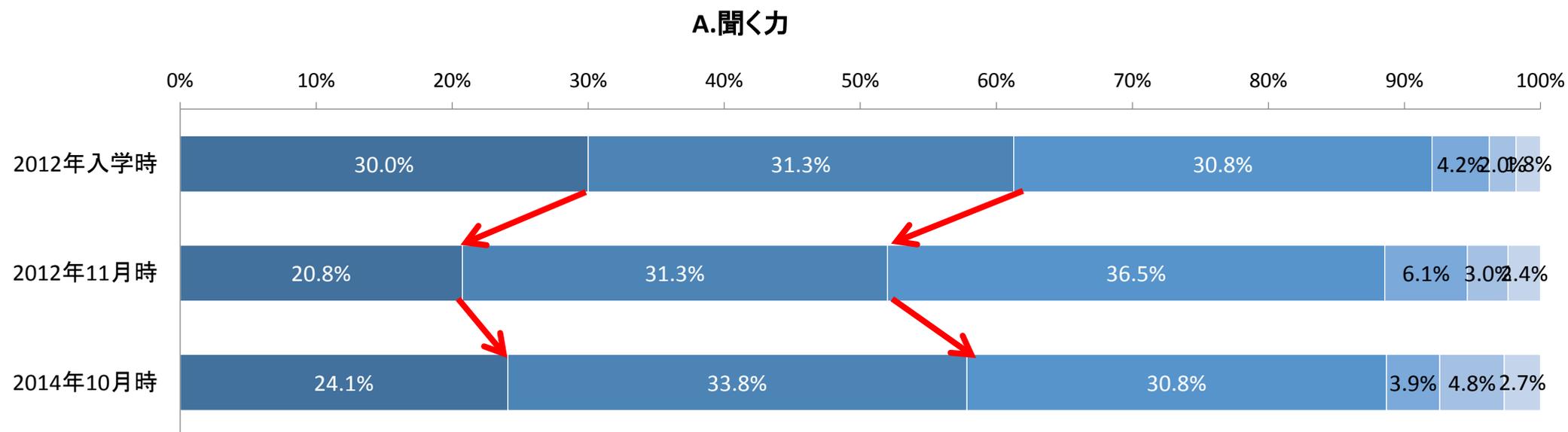


- A1.はっきりと、ゆっくり話してもらえれば、聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。
- A2.最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。
- B1.身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。
- B2.テレビのニュースや時事問題、標準語の映画ならほとんど理解できる。
- C1.特別な努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。
- C2.母語話者の速いスピードで話されても、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。

西田・畑野・上垣・大久保・高橋(2014)

# 2012年度一年生調査と2014年度上級生調査の比較(抜粋)

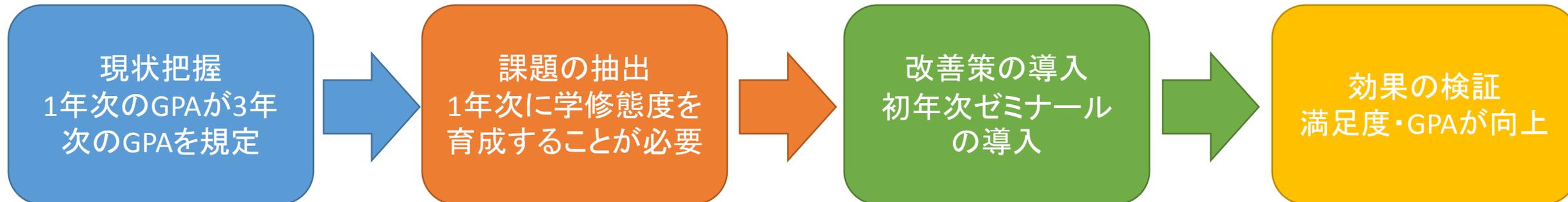
[11]英語能力を聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力の5つの観点から自己評価した場合に到達していると思うレベルをそれぞれについて1つずつ教えてください。



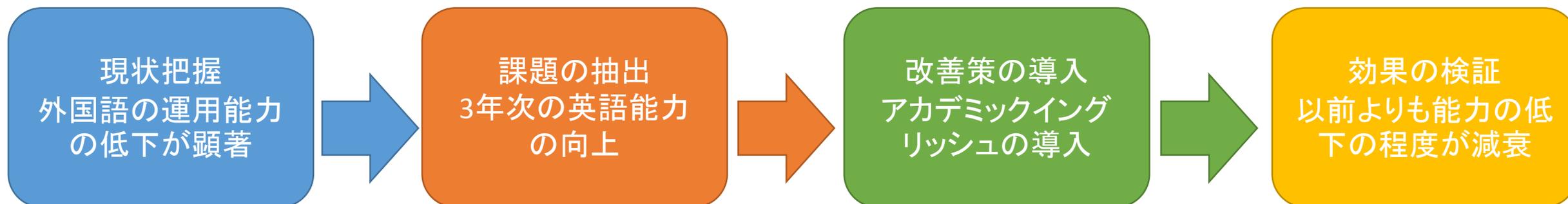
- A1.はっきりと、ゆっくり話してもらえれば、聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。
- A2.最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。
- B1.身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。
- B2.テレビのニュースや時事問題、標準語の映画ならほとんど理解できる。
- C1.特別な努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。
- C2.母語話者の速いスピードで話されても、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。

西田・畑野・上垣・大久保・高橋(2014)

## 初年次ゼミナールの導入



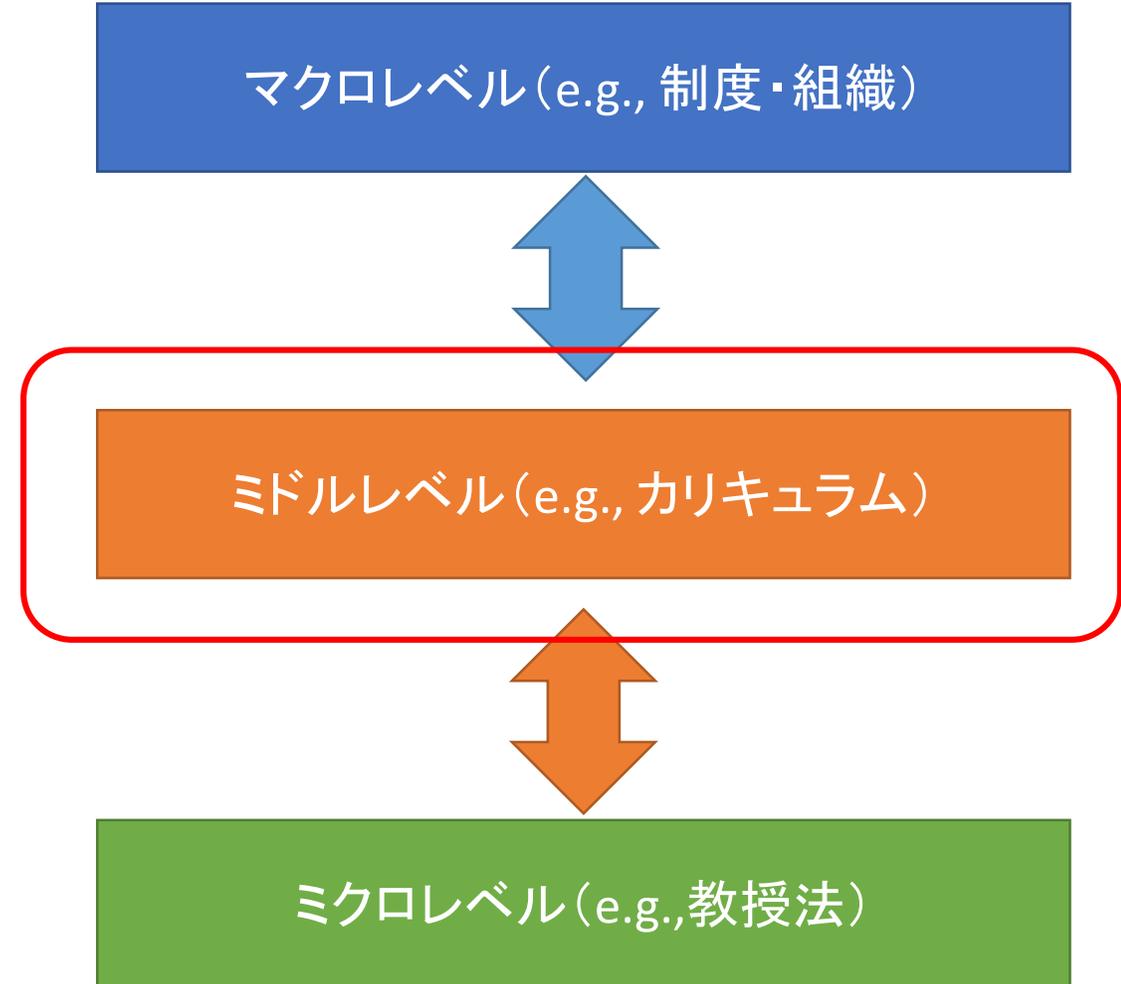
## Academic Englishの導入



\* 大学の現状把握、プログラムの効果の検証に教務データ、学生調査データを使用

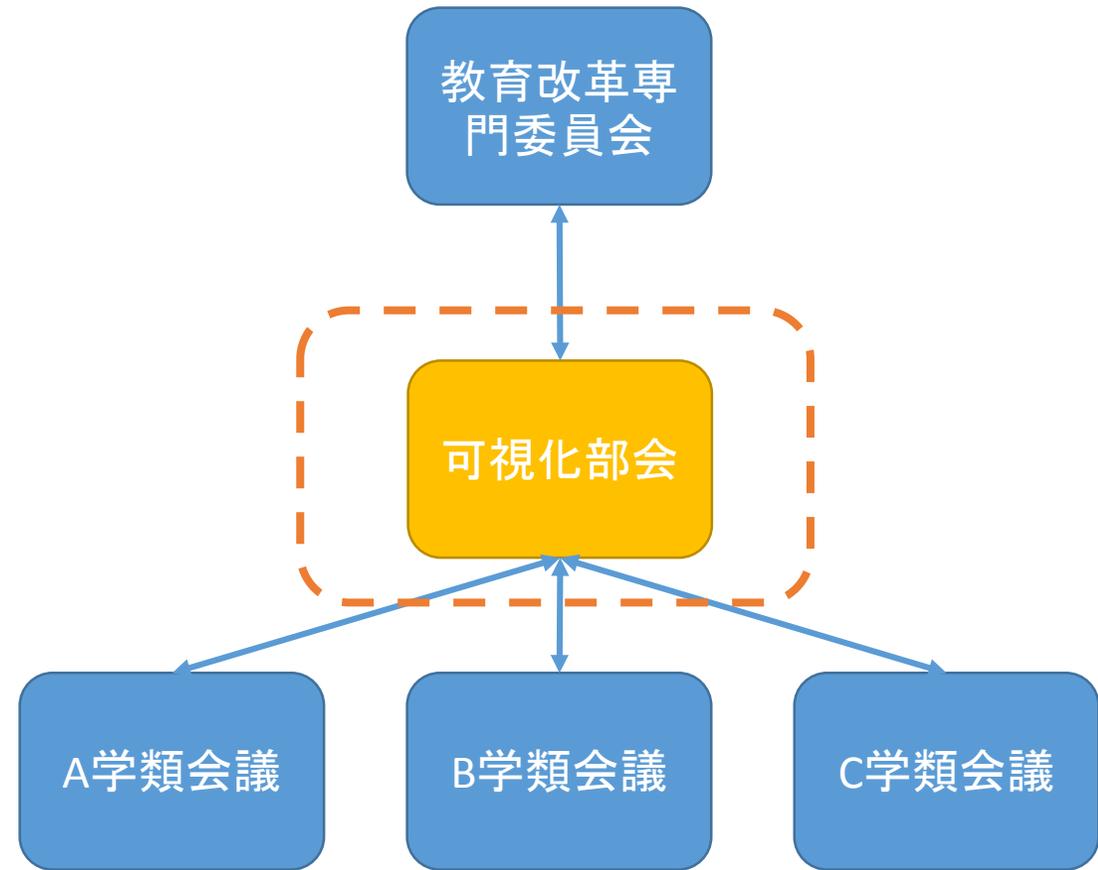
# これまでの取組みとFDの重層的アプローチ

- FD活動の重層的アプローチ  
(佐藤, 2013)
- これまでの取組みはマクロレベルでのFD活動
- ミドルレベル、ミクロレベルでのFD活動に教務データ、学生調査データは役立つか？



# APの取り組み

- 教育改革専門委員会の下に2つの部会(可視化部会・アクティブラーニング部会)を設置
- 可視化部会の目的: 学生調査を各学類のFD活動に活かす方策について議論する
- 各学域から代表委員を選出し、委員は部会で議論された内容を各学類の会議で報告する



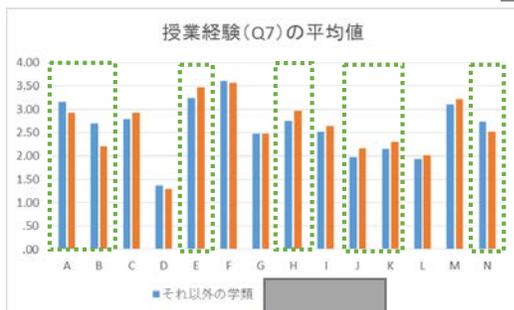
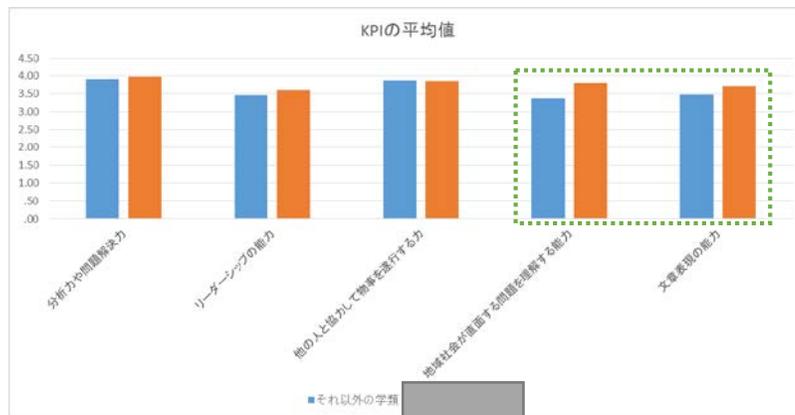
# 可視化部会での取り組み

- 2014年度：学生調査・教務データの知見を全学で共有
  - 2014年11月：これまでの学生調査データの結果から課題を共有
  - 2015年2月：直接評価テストのPROG(リアセック)の実施と結果の考察
- 2015年度：学類の教育目標と学生調査とのすり合わせ
  - 2015年5月：学類の教育目標とそれに即した学生調査の能力に関する項目 (Key Performance Indicator: KPI) を選定
  - 2015年8月：能力に寄与する授業経験や生活時間を分析
  - 2015年11月～12月：各学類を巡って結果をフィードバック

学類

A	一般的な教養													
B	分析力や問題解決能力	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
C	専門分野や学科の知識			○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
D	批判的に考える能力	○						○		○	○			
E	異文化の人々に関する知識													
F	リーダーシップの能力			○									○	
G	人間関係を構築する能力											○	○	
H	他の人と協力して物事を遂行する能力	○	○	○								○	○	○
I	異文化の人々と協力する能力													
J	地域社会が直面する問題を理解する能力			○					○		○		○	○
K	国民が直面する問題を理解する能力													
L	文章表現の能力			○				○						
M	外国語の運用能力						○	○			○	○		
N	コミュニケーションの能力	○				○	○	○		○		○	○	○
O	プレゼンテーションの能力			○	○	○	○	○		○				○
P	数理的な能力	○				○					○	○		
Q	コンピュータの操作能力					○								
R	時間を効果的に利用する能力	○												
S	グローバルな問題の理解									○				
T	卒業後に就職するための準備の程度									○				

## \*\*学類



地域社会が直面する問題を理解する能力・文章表現の能力  
→12学類の平均値よりも高い



なぜ“地域社会が直面する問題を理解する能力”が伸びるのか？

授業時間、授業外学習時間  
→環境システム学類の平均値は12学類の平均値よりも低い  
自主学習時間  
→12学類の平均値よりも高い



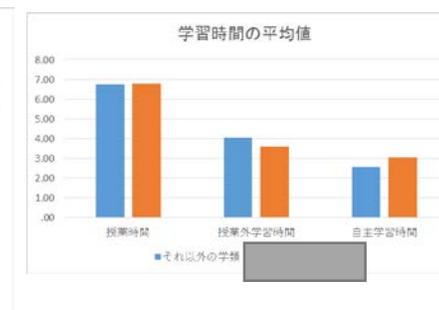
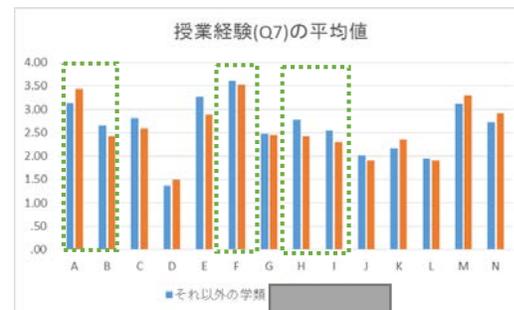
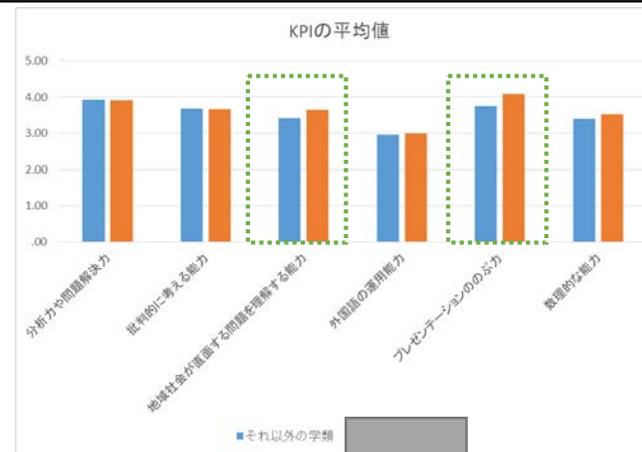
他の学類と比べて学習の自由度が高い？  
(ex. 資格試験、公務員試験の勉強)

項目A,Bの平均値が12学類の平均値よりも低い一方で、項目E,H,I,Kの平均値が高い



教員側がはたらきかけるよりも、学生主体の授業を行う傾向にある？

## \*\*学類



“地域社会が直面する問題を理解する能力” “プレゼンテーションの能力”の平均値が他の12学類の平均値よりも高い



実感と合うか？  
これらを伸ばすために工夫している点はあるか(カリキュラム、授業の方法など)？

学習時間は府大の中で平均的



授業外学習時間を伸ばすことに意義を感じているか？

項目Aの平均値が他の12学類の平均値よりも高い一方で、項目B,F,H,Iの項目の平均値は低い



B,F,H,Iの項目に見られるような学生主体型の授業は教育目標とあまり合致していない？

## KPIの達成に寄与する授業経験、生活時間

### 目的

各学類のKPIに影響を及ぼす学生の授業経験、生活時間を明らかにし、KPIを達成するための手立てを考えるための素地を整えること。

### 使用したデータ

2014年の上級生(3年生)調査に回答した学生を分析対象者とした。

### 分析手法

各学類ごとに授業経験【7】、生活時間【9】を説明変数、KPIを予測変数としたパス解析を2回行った。

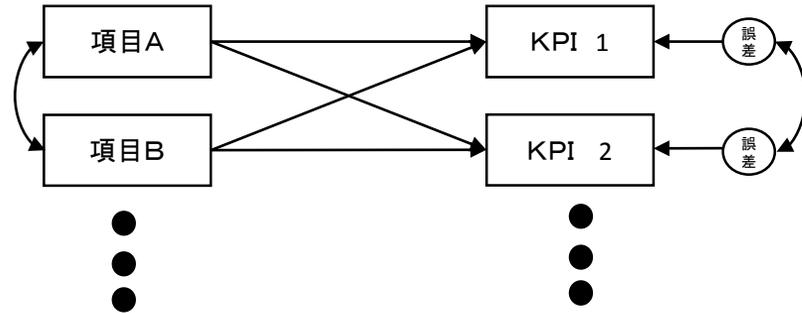


図1 検討したモデル

注 授業経験は学生調査の【7】の14項目、生活時間は【9】の8項目を使用した(以下に記載)。

### 分析に使用した項目

【7】受講した大学の授業で、次のようなことを経験する機会はどのくらいありましたか。  
【9】今年度になってから、あなたは次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。(上級生調査)

A.	実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ	A.	授業や実験に出る
B.	仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ	B.	授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする
C.	授業内容と社会や日常生活の関わりについて、教員が説明する	C.	授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする
D.	授業の一環でボランティア活動をする	D.	オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する
E.	学生自身が文献や資料を調べる	E.	部活動や同好会に参加する
F.	定期的に小テストやレポートが課される	F.	大学外でアルバイトや仕事をする
G.	教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する	G.	読書をする(マンガ・雑誌を除く)
H.	学生が自分の考えや研究を発表する	H.	個人的な趣味活動をする(テレビやゲーム、映画鑑賞など)
I.	授業中に学生同士が議論をする		
J.	授業で検討するテーマを学生が設定する		
K.	授業の進め方に学生の意見が取り入れられる		
L.	取りたい授業を履修登録できなかった		
M.	出席することが重視される		
N.	T A や S A などの授業補助者から補助を受ける		

(分析:高等教育開発センター)

## \*\*\*学類

### Key Performance Indicator (KPI)

分析力や問題解決能力  
リーダーシップの能力  
他の人と協力して物事を遂行する力  
地域社会が直面する問題を理解する能力  
文章表現の能力

表1 KPIに影響を及ぼす授業経験、生活時間(3年生:N=\*\*)

授業経験、生活時間	KPI	標準化係数
学生自身が文献や資料を調べる	分析力や問題解決能力	.30
授業で検討するテーマを学生が設定する	リーダーシップの能力	.29
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ	他の人と協力して物事を遂行する能力	.21
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ		.22
部活動や同好会に参加する	地域社会が直面する問題を理解する能力	.21
読書をする(マンガ・雑誌を除く)		.30
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ	文章表現の能力	.34

注1 グレーの網掛けの項目は授業経験、そうでない項目は生活時間の項目を表す。

注2 標準化係数が.20以上の項目のみ記載した。

## フィードバックの例

# 可視化部会での取り組みを通して

- 学類の先生のFD活動に役立つ資料となるか？
  - 先生にはFD=ミクロレベルのイメージが強く、ミドルの議論が難しい
  - ミドルレベルで学修成果を可視化することの必要性を感じていない先生が多い
- 学類によってFDの意識に違いがある
  - 国家試験が控えている学類とそうでない学類で温度差がある
  - “課題がない”と考える学類で何を進めるべきか

教務データ、学生調査データをつかったFD活動はマクロレベルでの導入・効果の検証は比較的容易(あくまで比較的!)であるが、ミドルレベルでのアプローチはかなりの工夫と文脈に応じたアプローチが必要!

# まとめ

- 初年次教育の導入、アカデミックイングリッシュなどマクロレベルでのFD活動は(比較的)うまくいっている
- ミドルレベルのFD活動に現在はトライ中(苦戦)  
(ミクロレベルのFD活動はセミナーなどを実施することで検討)
- マクロレベルでの学修成果の可視化やプログラムの検証などには効果的であるが、ミドルレベルでのFD活動に学生調査を活用するためには(かなり)慎重になる必要がある(各項目の信頼性・妥当性の議論は避けて通れない・・・)

# 引用文献

- 西田・上垣・畑野・大久保・高橋(2015)大阪府立大学における教学IRの実践と展開—学生調査の結果から—大学教育学会@長崎大学
- 佐藤浩章(2015)FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ  
大学教育学会課題研究報告書
- 高橋・星野・溝上(2014)学生調査とeポートフォリオならびに成績情報  
の分析について—大阪府立大学の教学IRの実践から—京都大学  
高等教育研究, 20, 1-15.
- 高橋・上垣・畑野(2015)大阪府立大学における初年次ゼミナールの  
導入と効果の検証, SPOD@愛媛大学